

〈研究ノート〉

キリシタンの棄教を表す 「ころぶ（転ぶ）」という言葉について*

岸本恵実

0. はじめに

キリシタンの棄教を表す「ころぶ（転ぶ）」及びその名詞形「ころび（転び）」という言葉は、1614年（慶長十四）徳川幕府が全国的な禁教・弾圧政策を始めてから用例が多く見えるようになる。本稿は17世紀前半ごろの、その起源から定着までを中心とした語史を探る小論である。

1. キリシタンの棄教を表す「ころぶ」「ころび」の用例¹⁾

「ころぶ」「ころび」については、徳川幕府の禁教政策によって1614年1月以降に行なわれた「倭責め」の拷問で信徒が実際に体を転がして棄教の意思を表したという語源説が『南蛮寺興廢記』など江戸時代からすでに見られ、現代においても『日本キリスト教歴史大事典』や、『角川古語大辞典』（角川書店、1984年、「ころぶ」の項）などで紹介されている。キリシタン禁制史については末尾の「キリシタン禁教に関する略年表」も参照されたい。

〈1〉『南蛮寺興廢記』（18世紀半ば成立）²⁾

慶長十六年より十六年過て寛永三年の頃より、六十六部の如き者、丹波近江等の近国其外遠国へも徘徊して、金銀を与へ、三世鏡を見せ勸め巡る者あり。諸国又此宗発する由聞へければ、庁所の官使厳く糾明して、改宗せざる者共を召捕、一人づゝ倭に入れ、京都三條河原、大坂御城の馬場、堺七道の浜、此三箇所に五十俵宛積上る。改宗の願ひ有る者は、倭の儘ころび出て願を達す。願所の宗門を聞、其寺の寺僧を呼び、其寺の檀那に仕る旨証文を奉行へ差出す。是寺手形の始る所なり。改宗する者をころぶと云も、是等の節に始る事なるべし。

* 本稿は、2008年3月8日(土)キリスト教史学会関西支部会（於関西学院大学大阪梅田キャンパス）における口頭発表「キリシタンの棄教を表す『ころぶ（転ぶ）』という言葉について」に基づくものである。貴重なご教示を賜った五野井隆史先生（最古の例について等）・神田千里先生（類義語・反義語について等）・清水紘一先生（ころび証文について）と、発表後ご教示を賜った皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

本研究は、科学研究費補助金「キリシタン版羅葡日辞書の原典的研究」（若手研究(B)研究代表者・岸本恵実)(18720120)による成果の一部である。

② 『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、1988年）

たわらぜめ 俵責め キリシタン拷問法のひとつ。1614年1月（慶長18.12）、上使として入洛した大久保忠隣がキリシタンを俵に入れ首だけを出して縛り糞虫のようにして賀茂河原に「五十石・三十石」ずつ積重ね、下積みの者が悲鳴をあげ、あるいは失神すると転がし出して棄教証文に記名させた。大坂の城の馬場、堺の七道の浜でも行われたという。『吉利支丹物語』に「きりしたんがしうてい（宗躰）共、たわらに入らるゝ事」と興味本位に記されている。〈転びキリシタン〉という語は、これから始ったともいわれる。（海老沢有道）

しかし実際、1614年1月以前の用例もいくつか見受けられる。これまでに見つけられた最も古い例は、1604年1月に書かれた「京坂信徒代表二十六殉教者列聖請願書」である。

③ 「京坂信徒代表二十六殉教者列聖請願書」1604年1月26日（慶長八年十二月二十五日）付³⁾

明れハ、大坂、堺を渡し、長崎において《二十六人を》はた物にかけ申候。是を見きく人々、真に御あるしせずきりしとのひいてすに対し、御命を拳玉ふ事、よき御鏡、よき談儀かなとおもひとり、ころひのきりしたんハ立あかり、よはきはつよくなり、つよきハなを又善をかさね、かゝるまるちりのみちならてハと望まぬきりしたんハ御座なく候。

これは「狩野源助平渡路」を筆頭とする京坂キリシタン総代の十二人が、1597年殉教した二十六人のキリシタンの列聖をローマ教皇に請願した文書であるという。このほか、1614年以前と見なしうる例としては以下の二点があった。

④ 『慶長日記』八 1612年4月（慶長十七年三月十一日）⁴⁾

此比吉利支丹御法度キヒシク被仰付小笠原権之丞榊原加兵衛原主水改易右之宗門タルニ依也コロビ候ハ、《右に「轉」字》御免可被成候由御意候へトモ承引不致候へテカクノコトク也

⑤ 『梅津政景日記』1612年5月3日（慶長十七年四月三日）⁵⁾

江戸へ駿河きりしたん御法度之由申来候、ゆへいかにと云に、岡本代八はじめはきりしたんにて候、此ほとはせかひにひかれ、ころはれ候由、申なし候、

上の三例の筆者について、「京坂信徒代表二十六殉教者列聖請願書」は京坂出身で庶民に近い人々かと思われ、『慶長日記』は筆者未詳ながら徳川氏に近い立場の武士、梅津政景

(1581-1633) は宇都宮生まれで常陸太田に育ち、秋田に暮らした武士であり、「ころぶ」は1612年頃特定の地域や階層のみで通用していたわけではなさそうである。

1604年以前も、ザビエルの鹿児島での宣教から、鹿児島(1552年ごろ)、島原(1567年ごろ)、京都(1565年ごろ)など各地で迫害は行われていた⁶⁾。1597年には長崎で最初の大きな殉教事件である二十六聖人の殉教があり、16世紀中にすでに迫害のあった土地などで「ころぶ」が用いられていた可能性は十分に考えられるが、1604年以前の用例は見つけられていない。

その後17世紀前半、キリシタン迫害の程度と規模が増すとともに「ころぶ」「ころび」の用例は多くなる。現在日本語最大の辞典である『日本国語大辞典 第二版』(小学館、2000-2002年)では、用例について「その語、または語釈を分けた場合は、その意味・用法について、もっとも古いと思われるもの」(凡例)を選択する方針を採っているが、「ころぶ」については「④キリシタンがその信仰を捨てて仏教などに改宗する。江戸時代、弾圧を受けたキリスト教徒についていう。」の意味で下記『慶長見聞集』の例をあげている。「俵責め」が「ころぶ」の語源でないことはすでに明らかになったが、用例の増加は事件後のことであり、この事件が普及の後押しをしたことは十分考えられる。

〈6〉 三浦浄心『慶長見聞集』卷之三(1614年序)⁷⁾

日本人のきりしたんころぶと云をは、命をたすけ、ころはさるをは諸国にて死罪に行ゝること数百人におよへり。

〈7〉 コリヤード(日本滞在1619年7月-1622年11月)『懺悔録』(1632年刊)⁸⁾

《弟子》また、この中將軍様の御法度に随つて、その奉行都より下られて、善悪このあたりのキリシタン衆を転ばせうとて、皆に判も据ゑ、キリシタンの行儀を閣け、せめて表面になりとも転べと頻に勧められたらによって、我等が女房子供の命を遁れうずる為に、終に口ばかりで転びました。

〈8〉 アピラ・ヒロン『日本王国記』(1615-1619年頃)⁹⁾

Hachikwan ha hecho *tera* de Dios su casa y cada semana se juntan en ella los cristianos un día que ellos llaman domingo, y allí predicán y se hacen muchos cristianos y son muchos más los Corondas que se levantan...

《1612年、江戸の朝鮮出身キリシタンの》ハチクワンは自分の家を彼の神の寺となし、彼らが日曜とよぶ日に毎週集まり、教えをとき改宗者をふやし、転んだ連中 *Corondas* で立ち上る者はさらに多く、

また法制用語としてもかなり早い時期から使われていたようである。ごく早い例として、

1614年の北九州小倉藩の例をあげる。『細川家記』の方は、小倉藩主細川忠興が領内を対象に発した令で、続く「きりしたんころび証文」はそれに応じた家臣による棄教の証文である。

〈9〉『細川家記』1614年3月2日（慶長十九年一月二十二日）¹⁰⁾

一、はてれんもんと、《中略》其内ニころひ候ものハくるしからず候、ころはさるものハ、下国次第、惣様如御法度可申付候間、可得其意候、侍共之儀異見を申、ころひ候様ニ可仕儀肝要ニ候、

〈10〉「きりしたんころび証文」1614年3月29日¹¹⁾

一、衆師御法度之旨 被仰候ニ付而何事も殿様御意を背申間敷と奉存ニ付今日よりころひ申候事

一、此已前者じやうど衆ニて御座候間以来も其分ニ可罷成候事

一、我等召仕申候者ノ内かたく申付候而皆々ころはせ申候事

右我等家内上下三人御座候皆々ころび申候

慶長十九年二月一十九日 杉無言（花押）

長岡右馬介様

長岡式部少輔様

その後「ころび証文」等法制用語としては長く例が見えるが、その他の文献では17世紀後半以降少なくなっていく。現実にキリシタン弾圧事件が減り棄教が身近でなくなるとともに、その意味で用いる機会も減っていったと思われる。以下の記述は、すでに18世紀には「ころび」がやや古い表現になっていたことを伺わせる。『口合恵宝袋』の「きりしたんころびの宗旨」「夷国ハころびがある」という言い方が笑い話とはいえ不自然であるし、『稿本俚言集覽』と長崎奉行岡部長常の書付からは、「ころび」が説明を要する語になっていたことがわかる。また、後年は動詞「ころぶ」よりも名詞形「ころび」という固定した表現が多い。

〈11〉『口合恵宝袋』巻五「ころび」（1755年刊）¹²⁾

きりしたんころびの宗旨ハ、きつい御法度でござるが、きけバ夷国ハころびがあるげにござるといひければ、いや〜夷こくばかりじやござらぬ。此比も東わきにござつた。それハ何ものでござる。いや、三味せんがこかしてござつた。

〈12〉太田全斎（1759–1829）『稿本俚言集覽』¹³⁾

コロビ《中略》又天主教の禁法ニころびあり回心の事也《中略》切支丹宗門を改めて八

宗の内になりたるをコロビといふ

〈13〉 岡部長常「肥前国浦上村百姓共異宗信仰いたし候一件の儀に付申上候書付」(1860年)¹⁴⁾

一、右一件の儀耶蘇教に紛敷宗體に御座候間、前々切支丹宗門のもの共改宗いたし候をころひと唱於奉行所姓名其外所業当廉書仕、

この後、幕末から明治初めの浦上四番崩れでは主に「改心」が使われている。

〈14〉 高木仙右衛門「高木仙衛門覚書」(1873年口述)¹⁵⁾

みな私共を一人づゝよびまして 改心せろと口攻めを致しました けれども 改心する事も うはむきばかりで捨つる事もかなひません と申しました

なおキリシタンの前後の時代において、キリシタン以外の棄教について「ころぶ」「ころび」が使われた例は未見であり、あるとしてもごく少ないと思われる。室町時代から江戸時代にかけて、一向一揆、豊臣秀吉から徳川時代の日蓮宗不受不施派、16世紀後半以降の人吉藩・薩摩藩の浄土真宗に対する弾圧などがあり、薩摩の隠れ念仏については特に江戸時代の中期から末期、キリシタンに対するのと同様の厳しい弾圧が行われたが、棄教には「宗旨替」「改宗」などが用いられている。

〈15〉 伊地知季安「御當家様就一向宗御禁制愚按下書 同補遺」(1835年)¹⁶⁾

《島津氏家臣による『上井覚兼日記』より引用、天正十三年九月十五日、《中略》皆々一向宗と聞得候。然共此前よりの事に候條、無届御成敗は如何に付、先々彼宗旨替可_レ申の由、被_レ仰、其の後も一向宗に候ひずる者は是非以生害させ申候て可_レ然の由《中略》右通御禁止の明文乍_レ有_レ之、《中略》地下人本来一向宗の故、右の通改宗被_レ仰渡_レ、

イエズス会士ルイス・フロイス著『日欧文化比較』によると、キリスト教徒であるヨーロッパ人と比較すると、日本人は堅固な信仰を持たずそれが不名誉とされなかったという。

〈16〉 ルイス・フロイス『日欧文化比較』(1585年序)¹⁷⁾

Entre nós se tem por elche e arrenegado o que muda a lei:

em Japão se troca a seita cada vez que em quer, sem nenhuma infâmia.

われわれの間では教えに背いた者は背教者、変節者とされる。日本では望みのままに幾度でも変節し、少しも不名誉としない。

これはヨーロッパとの比較の都合上やや誇張された言い方であろうが、信仰を保持するか棄教するかを問われることは1585年ごろの日本では珍しいことであり、キリシタン弾圧が規模からも程度からも日本史上例のないことであったのではないか。すなわちキリシタン以前では「ころぶ」という単純な俗語一語で表すのが適当なほど、外圧によって内面の信仰を棄てさせられることが日本では一般に行われたことがなかったと考えられよう。

2. 日本語「ころぶ」の意味

ここまで、「ころぶ」が17世紀を中心にキリシタンの棄教を表すのに用いられたことを述べてきた。以下では、日本語の「ころぶ」が棄教を表すための比喩表現として使われ始めた理由を考えるために、「ころぶ」の棄教以外の意味と、棄教の意味の類義語・反義語を検討したい。

はじめに長くなるが語義の先行研究として、『日本国語大辞典第二版』と、室町時代語を扱った『時代別国語大辞典室町時代編』の「ころぶ」の意味記述をあげておく（用例は*のあとに出典のみ記し、引用は割愛した）。

①『日本国語大辞典第二版』（小学館、2000-2002年）

①ころころと回転する。ころがる。まろぶ。

*平家物語〔13C前〕 *名語記〔1275〕 *徒然草〔1331頃〕

②倒れる。現代では、人などがつまずいて倒れる場合にいう。こける。

*土井本周易抄〔1477〕 *御湯殿上日記-明応七年〔1498〕 *足利本論語抄〔16C〕
*虎明本狂言・二千石〔室町末～近世初〕

③横になる。臥す。寝ころぶ。*人生の幸福〔1924〕

④キリシタンがその信仰を捨てて仏教などに改宗する。江戸時代、弾圧を受けたキリスト教徒についていう。転じて、自己の主義、主張を捨てて転向する。

*慶長見聞集〔1614〕 *懺悔録〔1632〕 *俳諧・鷹筑波〔1638〕 *仮名草子・仁勢物語〔1639～40頃〕 *考史遊記〔1954〕

⑤男女が私通する。

*仮名草子・薄雪物語〔1632〕

⑥芸者、遊女、しろうと女などがひそかに売色する。

*虎明本狂言・二人大名〔室町末～近世初〕 *洒落本・辰巳之園〔1770〕

⑦物事のなりゆきが別の方向に変わる。ある事態になる。また、ある方向に気持が移る。なびく。

*歌舞伎・東海道四谷怪談〔1825〕 *西洋道中膝栗毛〔1874～76〕 *当世書生気質〔1885～86〕 *彼岸過迄〔1912〕

⑧（「ころんでいる」の形で）何もしないでぶらぶらしている。*少年行〔1907〕

〈18〉『時代別国語大辞典室町時代編』（三省堂、1989年）

①丸みのあるものが、はだめを失って斜面を回転しながら落ちていく。

* 史記抄 * 太平記

②立っている人や物が、何かのはずみで安定を失って倒れる。また、その横になったままの状態にいる。

* 日葡辞書 * 応永本論語抄 * 玉塵 * 太平記 * お湯殿の上の日記

③キリシタン宗徒が、外圧によって、それまでの信仰を持しきれなくなって、仏教徒に転向することを卑しめていう。

* 懺悔録 * 当代記

④女が、金次第で相手を選ばず身をまかすことをいう。

* 虎明本狂言

2.1. 「ころぶ」の類義語・反義語

上掲の『時代別国語大辞典室町時代編』の意味記述①～④が、上代から現代までを扱う『日本国語大辞典』に必ずしも収まりきらないように見えることから伺われるが、当時「ころぶ」が現代とはやや意味が異なり「落つる」「倒るる」の類義語であったことが、キリシタンが編纂した辞書『羅葡日辞書』『日葡辞書』から確かめられる。

『羅葡日辞書』は、日本人のラテン語学習とともに外国人の日本語学習も編纂の目的としており、日本語を学ぶ外国人のために、ラテン語の見出しに様々な（日本語の）類義語が付けられていると「凡例」にある。日本語訳中の「ころぶ」14例と複数回併記されている類義語は、「落つる」が7例 (Accido, Caso, Concido, Excido, Incido, Labo, Ruo)、「倒るる」が2例 (Labo, Ruo) であった。

〈19〉『羅葡日辞書』（1595年刊）¹⁸⁾

Concido, is, cidi, casum. Lus. Cair. Iap. Corobu, votçuru.

Incido, is, cidi, casum. Lus. Cair. Iap. Votçuru, corobu. ...

Labo, as. Lus. Cair. Iap. Votçuru, corobu, tauoruru. ...

また『日葡辞書』の「ころぶ」のポルトガル語訳には、「落つる」「倒るる」と同じ Cair が用いられている。なお Cair は上掲のラテン語 Cado, ere, cedici, casum を語源とするポルトガル語であり、『羅葡日辞書』には Cair, 「落つる」のポ日訳が当てられている。

〈20〉『日葡辞書』（1603–1604年刊）¹⁹⁾

Corobi, u, ôda. Cair. 《倒れる、落ちる》Dôdo corobu. Cair dando baque, ou fazendo estrôdo.

《どしんと音をたてて、または、大きな響きを立てて倒れる》

Vochi, tçuru, ita. *Cair de alto*. 《高い所から落ちる》 ¶Conomiga votçuru. *Cair a fruta da aruore*. ¶Togani votçuru. *Cair em peccado*. ¶Sono fitoni vochita. *Consenti com esse homem, ou com essa pessoa caindo com ella em peccado*. ¶Xiroga votçuru. *Renderse a fortaleza*. ¶Xucqueu votçuru. *Deixar a religião, & fazerse secular*. ¶Itê, *Fugir, ou acolherse vencido na guerra*. ¶Itê, Vochi, tçuru. *Confessar o seo, ao o que leua tratos a verdade*. ¶T, Tôniaua vochiide, cataruni votçuru. *Perguntando lhe calou, & em pratica sem tratos confessou*.

Tauore, ruru, eta. *Cair no chão*. 《地面に倒れる》 ¶Item, permet. *Cair de seu estado, renda, &c.* ¶Xinxōga tauoruru. *Cair o estado dalguê*.

また「ころぶ」の反義語には同じく比喩的な表現として「立ち上がる」「立ち帰る」などがあり、上述の「京坂信徒代表二十六殉教者列聖請願書」でも「ころひのきりしたんハ立あかり」と用いられていた。

・21> 『日葡辞書』

Tachiagari, ru, atta. *Aleuantarse empè, ou direito*. 《足で、または、まっすぐに立ち上がる》 ¶Permet. 《比喩》 Ienni tachi agaru. *Tornar ao caminho da virtude, ou conuertarse ao bem*. 《善徳の道に戻る、または、善に転向する》

・22> 南蛮誓詞「吉利支丹ころひ申しゆらめんとの事」(1635年)²⁰⁾

一、吉利支丹宗旨に成、此前方ねかひ申候事今に後悔に御座候間、後々末代きりしたんに立帰る事仕間敷候、

コリヤード著『日本キリシタン教会史補遺』では、スペイン語訳ながら、堺出身のキリシタン商人平山常陳による1622年の説教が伝えられている。これは二人の宣教師フロレスとズニガの日本潜入を手助けした彼が長崎で処刑される前に述べたものであるが、信仰について、悔やむ(現代語原形 *arrepentirse*)・棄教する(*renegar*)という動詞とともに比喩的に *cair*(転ぶ)、*levantarse*(立ち上がる)を用いており、おそらくコリヤードは日本語の「ころぶ」「立ち上がる」を訳したものと思われる。

・23> 『日本キリシタン教会史補遺 1621-1622』(1633年)²¹⁾

転んだ者、教えを棄てた者は立ち上り、立っている者は転ばぬよう心して下さい。

arrepientanse, y leuantense los caidos, y renegados, y los que estàn en pie miren no caigan,

現代語では「倒れる」と「転ぶ」の違いとして、「転ぶ」は主体が人間・動物に限られる

こと、主体が動いていることが前提であることが指摘されているが²²⁾、これは 16-17 世紀の場合必ずしも当てはまらない²³⁾。回転する意味での「転ぶ」、横になった状態の継続に重きを置く場合の「倒れる」など、他方に言い換えられなかったと思われる例もあるが、どちらにも「安定して立っていたものが外の力を受けて横になる」という基本的な意味があって、現代語よりも意味の重なりは大きかったようである²⁴⁾。

2.2. 改宗を表す類似表現

改宗を表す類似の表現としては「宗旨を変える/変ゆる」「改宗」などが見られ、これらは「ころぶ」以前とみられる用例がある。なお、現代使われる漢語「棄教」「背教」「転宗」について、16-17 世紀の用例は未見である。

〈24〉『サントスの御作業』巻二（1591 年刊）²⁵⁾

サポルこれを聞いて大きに怒り、《セレウシヤのビスポであったシメヨンに》宗旨を変えよと、様々に勧めらるれども

〈25〉大久保忠教『三河物語』（1625-1626 年）²⁶⁾

其後《家康は》土呂、鍼崎、佐崎、野寺之寺内ヲ敗給ヒテ一向宗ニ^{シツ}宗シヲカエヨトキセウヲ書セラレ給エバ

〈26〉『春日権現験記絵』巻十四（1309 年）²⁷⁾

或寺僧一念発心によりて南都をさりて後縁にふれて天台止観を学して《中略》後に彼僧人にかたりけるは、改宗の心なけれともをのつからこれを忌てかれにつく

〈27〉『サントスの御作業』巻二（1591 年刊）²⁸⁾

悪王これを聞いて《中略》先づキリシタンを翻させんために、無量の災難をしかけて、

〈28〉『羅葡日辞書』

Apostasia, ae. Lus. Apartamento de seu capitam, ou de sua religião. Iap. Vaga taixóuo somuqi sutçuru cotouo yũ, l, vaga xũtei, monpauo frugayesu cotouo yũ. 《我が大将ヲ背キ捨ツルコトヲ言フ、または、我が宗体、門派ヲ翻スコトヲ言フ》

Apostata, ae. Lus. Apostata que desempata seu capitam, ou religião. Iap. Vaga taixóuo somuqi sutçuru mono, l, xũtei, mōpauo frugayesu mono. 《我が大将ヲ背キ捨ツル者、または、宗体、門派ヲ翻ス者》

「ころぶ」を上記の類似表現と比べた時、使われ始めた時期の違いの他に表記や意味について以下の四つの特徴を指摘できる。

ア 語形が短い。

イ 和語で、仮名で書かれることが多い（俗語であったと思われる）。

ウ 比喩的な表現である（文字を見ればわかるような説明的表現ではない）。

エ 話し手の否定的評価を含む（非キリシタンが用いた例が多い）。

非キリシタンからすれば改宗は肯定されることであったはずだが、信仰を貫けなかった者に対する侮蔑の感情を含んでいる。

これらの類義語および反義語から考察するに、当時「ころぶ」という言葉は現代語と比べると「回転する」よりも「下方に落ちる」「立っていたものが倒れる」という意味合いが強く、外圧を受けて保っていた信仰を放棄することを否定的な感情を伴って端的に言い表すのに、適当でごく身近な表現であったと考えられる。

3. おわりに

16世紀末全国統一政権によりキリシタンが棄教を強要される事態が起こったころから、動詞「ころぶ」は、本来持っていた意味から棄教する意味で比喩的に用いられるようになったと考えられる。個人の内面の信仰を権力によって棄てさせるという宗教弾圧が日本で稀であったことに加え、興隆から弾圧への急転、迫害の規模や峻烈さから、対象をキリシタンに限定した俗語として比較的短時間で全国に広まり、法制用語としても定着したのであろう。

註

- 1) 以下、現代語や引用を除き「ころぶ」「ころび」は原則としてひらがなで表記する。また引用箇所の下線および《 》内はすべて筆者による。
- 2) 鷲尾順敬編『日本思想闘争史料 第十卷』名著刊行会、1969年、306頁。
- 3) 松田毅一『近世初期日本関係南蛮史料の研究』風間書房、1967年、937-939頁。
- 4) 史籍研究会編『内閣文庫所蔵史籍叢刊 65 慶長見聞録案紙 慶長日記 慶長年録 元和年録』汲古書院、1986年、196頁。このほか同書所収の『慶長年録』慶長十七年三月十一日にもほぼ同文の記述がある。
- 5) 東京大学史料編纂所編『大日本古記録』岩波書店、1953年、27-28頁。
- 6) 五野井隆史『日本キリシタン史の研究』吉川弘文館、223-229頁。
- 7) 中丸和伯校注『慶長見聞集』新人物往来社、1969年、91頁。
- 8) 大塚光信『コリヤードさんげろく私注』臨川書店、1995年、22頁。
- 9) Doroteo Shilling, Fidel de Lejarza, "Relación del Reino de Nippon por Bernardino de Avila Girón," *Archivo Ibero-Americano* num. 118, 1935, 225. 邦訳は、佐久間正ほか3名訳注『アビラ・ヒロン日本王国記 ルイス・フロイス日欧文化比較』岩波書店、1965年、319頁。Corondasには、上記

書にそれぞれ“*Koronda es el perfecto del verbo «korobu» caer, y designa a los que han retrocedido de la fe cristiana.*”[『転んだ』という日本語動詞の過去形を、エスパニヤ語動詞の語形にあてはめて用いたもの(土井)]との注がある。さらに邦訳 662 頁にもアビラ・ヒロンが用いている動詞 *corondear* について補注がある。アビラ・ヒロンはスペイン人商人と思われる人物で、1594-1598 年と 1607-1619 年に日本に滞在し、1619 年以降の消息は不明である。

- 10) 東京帝国大学編・発行『大日本史料 十二編十三』1909 年、438 頁。
- 11) 川口恭子校訂「きりしたんころび証文」『熊本史学』第 19-20、1961 年。
- 12) 武藤禎夫・岡雅彦編『嚙本大系 第八卷』東京堂出版、1976 年、254 頁。
- 13) 『俚言集覧自筆稿本版 第十卷』クレス出版、1993 年、460 頁。上掲書第十一卷所収の北村孝一「俚言集覧の成立と増補過程」によると見出しが漢字平仮名混じりのものは全斎以後の増補であるといい、カタカナ見出しのこの部分は全斎筆か。なお太田全斎は幕府宗門改役の記録書『契利斯督記』の編者でもある。
- 14) 谷川健一編『日本庶民生活史料集成 第十八卷 民間宗教』三一書房、1972 年、853 頁。1856 年起こった浦上三番崩れの史料である。
- 15) 同上、868 頁。
- 16) 同上、393 頁。
- 17) Luís Fróis; apresentação de José Manuel Garcia, fixação de texto e notas por Raffaella D'Intino, *Europa Japão: um diálogo civilizacional no século XVI: tratado em que se contém muito sucinta e abreviadamente algumas contradições e diferenças de costumes entre a gente de Europa e esta província de Japão* (...), Lisboa: Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses, 100. 邦訳は前掲『アビラ・ヒロン日本王国記 ルイス・フロイス日欧文化比較』556 頁。
- 18) 福島邦道・三橋健解題『羅葡日対訳辞書』勉誠社、1979 年。なお類義語の併記数について、Xiguequ のような副詞や句を含むものは入れて数えたが、*corobi sōnari* のように助動詞を含んでいるものや *corobicacaru* のように複合動詞になっているものは入れなかった。あくまでも概要を掴むための目安として見られたい。
- 19) 大塚光信解説『エヴォラ本日葡辞書』清文堂出版、1998 年。
- 20) H. チースリク・太田淑子編『日本史小百科キリシタン』東京堂出版、1999 年、「南蛮誓詞」(村井早苗) 215 頁。京都所司代板倉重宗が示した、棄教者がキリスト教の神に誓う形式の起請文のひな型という。
- 21) Diego Collado, *Suplemento y Adiciones a la Historia Ecclesiastica de los Sucessos de la Christiandad de Japon, 1627-1622*, Madrid, la viuda de Alonso Martin, 1633, 161r. (上智大学キリシタン文庫所蔵本による)。邦訳は、井出勝美訳・ホセ・デルガド・ガルシア註『コリヤド日本キリシタン教会史補遺 1621-1622 年』雄松堂書店、1980 年、140 頁。
- 22) 柴田武編『ことばの意味 2 辞書に書いてないこと』平凡社、2003 年(1979 年の再刊)、242-245 頁。
- 23) 『時代別国語大辞典室町時代編』にあがっている例から言えば、『史記抄』の「雨タレキワニアルマルイ石ソ クラ〜トシテアツチヘコロヒ コチヘコロフヤウナナリヲ云ソ」という石が主体になっている例や、『応永本論語抄』の「屏ナトハ漸々ニ湿気が積リテ 上ハハミエネドモ下地カクサリテ ソトシタル風ナトニモ一度ニコロフ如ク」という(非生物でかつ動いていなかった)塀の例があるし、今日でもことわざの「転ばぬ先の杖」に残っている。
- 24) このほか当時の「ころぶ」の類義語として、「こける」「まろぶ」「ころがる」「ころげる」にも言

及しておきたい。「こける」は「ころぶ」とよく似た意味をもっていたようであるが、『日葡辞書』にはあるものの『羅葡日辞書』には見えず、狂言や御伽草子、江戸時代の例が多く「ころぶ」より新しい俗語であって、「ころぶ」ほど一般的ではなかったとみられる。逆に「まるぶ」は平安時代から例があり、「ころぶ」の雅形とみなされ、日常語ではなかったようである。「ころがる」「ころげる」はさらに新しい語らしく、キリシタン時代の用例はごく少ない。

- 25) H. チースリクほか解説『サントスの御作業』勉誠社、1976年、309頁。
- 26) 中田祝夫編『原本三河物語 影印篇』勉誠社、1970年、194-195頁。
- 27) 小松茂美編『続日本絵巻大成 15』中央公論社、1982年。
- 28) H. チースリクほか解説、前掲書、305-306頁。

付・キリシタン禁教に関する略年表（西暦・和暦）

- 1587 天正十五 豊臣秀吉が伴天連追放令を發布する
- 1597 慶長元 2/5 一二・二九 二十六聖人殉教事件が起きる
- 1612 慶長十七 4/21 三・二一 岡本大八事件が起きる
徳川幕府が京都所司代板倉勝重に京都市内の教会破壊を命じる
9/1 八・六 幕府が天領・旗本・有馬領にキリシタン禁令を發布する
- 1614 慶長十九 1/28 一二・一九 幕府がキリシタン弾圧のため大久保忠隣を京都に派遣する
2/1 一二・二三 幕府が伴天連追放文を發布する
2/25 一・一七 大久保忠隣が京都に着き、教会などを破壊する
- 1617 元和三 この頃より各地で殉教事件が相次ぐ
- 1628 寛永五 この頃より絵踏が始まる
- 1634 寛永十一 この頃より各地で転び証文の徴収が始まる
- 1637-38 寛永十四～十五 島原の乱
- 1640 寛永十七 幕府が宗門改役を置く
- 1657 明暦三 郡崩れ事件が起こる
- 1660 万治三 豊後崩れ事件が起こる
- 1790 寛政二 浦上一番崩れ事件が起こる
- 1842 天保十三 浦上二番崩れ事件が起こる
- 1856 安政三 浦上三番崩れ事件が起こる
- 1867 慶応三 浦上四番崩れ事件が起こる
- 1868 明治元 明治政府がキリシタン禁制高札を掲げる（五榜の掲示）
- 1873 明治六 キリシタン禁制高札が撤去される

この年表は、『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、1988年）、H. チースリク・太田淑子編『日本史小百科キリシタン』（東京堂出版、1999年）をもとに作成した。